

(資料)

環水荘遺翰——加野宗三郎宛書簡集—— (一)

井**國*
上 生
洋 雅
子 子

(一) はじめに

1 加野宗三郎と環水荘

『福岡県百科事典』上巻(西日本新聞社 一九八二年一月)には、加野宗三郎について以下のように記されている。

加野宗三郎 かのそうざぶろう 1889・7・14～1946・1・23(明治22～昭和21)福岡市中興堂町(博多区)生まれ。
中学修猷館から大阪高等工芸学校醸造科卒。帰福して家業の酒造業萬屋を営むかたわら美術や文芸に関心を向け、多くの美術

*福岡大学人文学部名誉教授
**福岡国際大学名誉教授

家や詩人・俳人らと交遊をもつ。その別邸柳北亭や観水荘は来福の文人墨客のたまり場となった。交友のあった美術家には、青木繁、青山熊治、津田清楓、森田恒友、正宗得三郎、村上華岳、榎原紫峰、富田溪仙、小野竹喬、山崎朝雲、富永朝堂、恩地孝四郎などがあり、文筆家では与謝野鉄幹・晶子夫婦、北原白秋、吉井勇、高浜虚子といった人たちがいた。その中の幾人かは大阪遊学中からの友人であったと考えられる。芸術家のパトロンの存在であったのは、家業の酒造業がいきづまり、観水荘を手放した1934年（昭和9）ごろまでであったと思われる。（古川智次）

「大阪高等工芸学校」は「大阪高等工業学校」をさすと考えられる。現在の大阪大学工学部である。「観水荘」は正しくは「環水荘」。二つの池が敷地を取り囲んでいたため、北原白秋が名付けたとも伝えられている。宗三郎は「金盛」という銘酒で知られていた富裕な造り酒屋・万屋の四代目。多くの画家・文学者のパトロンで、自らも俳句をたしなみ建築にも造詣が深かった。受け継いだ財力を傾けて美と芸術を追い求めた彼の最高傑作が、雑餉隈にあった環水荘とも言えるだろう。そして当然のこととして商売は傾き、贅を凝らした別荘も人手に渡ってしまった。まことに見事な趣味人の一生。酒で築いた財は、酔夢のうちに蕩尽されるべきものなのかもしれない。初代・堺宗平は新宮の出で、二代目の惣次郎から加野姓を名乗った。ここにはひとり娘のカメしか生まれなかったため、甥にあたる熊次郎を養子に迎え、待望の跡継ぎを得た。それが宗三郎である。初代・宗平は一代で財を築いた立身伝中の人物だが、一族の中には何故か趣味人が多い。宗三郎の父・熊次郎は筑前琵琶の名手・吉田竹子を愛人とし、彼女の売り出し（筑前琵琶の普及）に尽力した。二代目、三代目ともに壮年期に早く死去したが女性は長寿で、家には祖母（惣次郎の妻）モト、母のカメがいた。ちなみに美人で有名だった彼女は息子より一六年も長生きし、昭和三七年に八九才で亡くなっている。

四枚ほど写真を紹介したい。写真1は中奥堂（現・博多区冷泉町）にあった万屋の店舗兼住宅である。写真2は名前の由来となった池から環水荘を臨んだショット。写真3は建物の全景で、4は右手にある萱葺の展望台。この棟は写真2にも映っている。

昭和三年七月、白秋の「芸術飛行」と称する帰郷の際に書かれた紀行文「身は香雲のごとく」(大阪朝日新聞)夕刊一九二八年八月一〇日)には、「雑餉隈の環水荘。二つの大きな池の中の島。その島の厚い萱葺の芸術の城、古代と近代との合奏建築。友加野氏の芸術はその自らの水荘に個の表現を完成した。おそらく日本に二つとない詩の清らかな立体抒情風景の中に、私たち家族は懇に招かれた幸福な旅客としての一夜と半日を送つたのだ。」と記されており、昭和三年には一応完成していたとみられる。

写真1



写真2



写真3

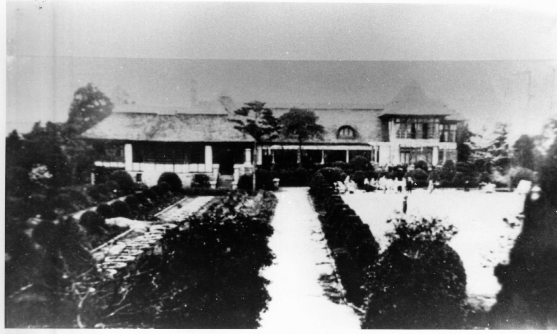


写真4



二四二

原田種夫「博多散歩 環水荘の跡」〔博多ばってん〕102号 一九七一年四月 注1) によれば、環水荘の跡地は博多区元町のマンション、ローレルハイツ南福岡となっている。昭和四年に環水荘滞在中の与謝野寛・晶子夫妻を訪ねたことのある彼は、同マンションに住む息子を訪ねた折に、当時の裏門がそっくり残っていることに気づいた。敷地を巡る二つの池のうち一つをつぶ

して建てられたらしいが、現在地図で池は確認できず、すべて埋め立てられたとみられる。私（國生）が平成五、六年の頃訪ねた折は、確かに池が一つ残っていた。

なお、福岡市内住吉に別に日本建築の別邸があった。祖母のための隠居所で、津田清楓が命名したとも伝えられているが、完成年次など正確なことは不明である。「柳北亭」と呼ばれるこの建物は、環水荘が手に渡った後宗三郎が住み、戦後は嫁いだ娘たちの家族も含めて、一族が身を寄せた。次に詳述する宗三郎次女・大内真砂子氏は最後までこの柳北亭に母親と暮らし、昭和三年に母親（宗三郎妻）トミエが死去した後、売却されたとのことである。昭和一八年四月二日、同七月二八日の津田清楓の書簡では、住所は「福岡市住吉花園1696」となっている。

2 大内家収蔵資料について

宗三郎には三人の娘がいた。長女・千賀子（大正二年生）、次女・真砂子（同五年生）、三女・春生（同八年生）である。皆他家に嫁し、それぞれ伊藤、大内、安西の姓を名乗った。大宰府にお住いの大内真砂子氏をご紹介下さったのは、大牟田の故・白仁欣一氏であった。氏は白秋の少年時代からの文学仲間で、与謝野寛・晶子夫妻に師事した歌人の白仁秋津（本名・勝衛）の長男である。父が残した書簡や書籍、雑誌といった資料を実に丹念に整理し保管していらした。大内氏を初めてお尋ねしたのはいつであったのか記憶していない。ただ、「平成四年四月十二日制作」と記された「加野宗三郎宛書簡仮目録」が残されている。『福岡県百科事典』にも記載されている文学者、画家の他、白仁秋津、土田麦僊などの書簡一五五通（修正して一五四通）が記録されている。ただし、青木繁、富永朝堂、恩地孝四郎のものは確認できなかった。その時点で、既に北原白秋書簡は岩波書店『白秋全集』三九卷（一九八八年四月）に収録されており、また、出版が予定されている与謝野夫妻の書簡集のために資料を提供済みとのことであった。大内氏のご厚意でそれらを含む全書間を複写し、また写真や親戚の方が作成された加野家の家系図等の資料のコピーもご

許可を頂いた。大内氏からは様々なお話を聞かせて頂いたが、詳細なメモを取っていなかったことが悔やまれてならない。写真の解説のみは音声記録が残っており、二本のカセットテープの一つには「93.6.20」の日付がメモされている。その後國生、井上の二名で書簡の翻刻作業を行ったが、遅々として進まず、中断期間を挟みつつ漸く二〇〇九年には原稿が完成した。既に与謝野夫妻の書簡は、二〇〇一年に刊行が始まった八木書店『与謝野寛晶子書簡集成』に収録されていた。だが、諸般の事情から大内氏と私たちとの連絡は途絶えてしまったのである。二〇〇六年と翌年には僅かな手掛かりを頼りにご家族にコンタクトを取ろうと試みたものの、徒勞に終わった。大内氏からは口約束でご許可を頂いてはいたが、公にするためにはもう一度正式な承諾を頂くべきと考え、長い間原稿は塩漬けとなっていたのである。しかし、二〇二〇年コロナ禍の直前、井上の元に長女千賀子氏、三女春生氏のお子さんより相前後して連絡が届いた。長女・千賀子氏は竜太郎、象次郎の双生児をもうけたが、象次郎氏が加野姓を継ぎ、宗三郎が収集した絵画や与謝野夫妻、白秋、吉井勇などの色紙、短冊の類を受け継いでいた。それらは二〇二〇年元旦の「日本近代文学館」館報二九三号が伝えるように、同館へ寄贈され、井上は同報の二九五号（二〇二〇年五月一日）に「加野宗三郎の文事―寛・晶子「金泥歌経」の周辺から」を執筆した。また、宗三郎旧蔵の小野竹喬の日本画は岡山県笠岡市立竹喬美術館に寄贈され、二〇二二年三月一九日―五月八日の期間、「大正の文人画ネットワーク―加野宗三郎コレクションを中心に」と題された展覧会が行われた。このように、加野宗三郎の事績に注目が集まる中、三女春生氏の次女・北條幸子氏のご助力を得て、大内氏収蔵資料の現在の所有者が判明し、その方のご許可を頂いて、この度公表の運びとなった。尚、大内真砂子氏は二〇一〇年一〇月一九日に九四才で亡くなられたとのことである。初めて加野宗三郎宛書簡を目にしてから、実に三〇年ほどの月日が経過している。白仁氏の知遇を得たのは、私（國生）が大牟田の短大に勤務していた縁からである。大内氏は筑紫女学院大学の近くにお住まいで、同校の茶道部の指導をなさっていた。筑女は私の二校目の勤務校である。そして、最後の勤務校となった福岡大学人文学部「人文論叢」の誌面を発表の舞台としてお借りすることになったのは、個人的に感慨深い。

3 書簡概要及び凡例

書簡本文の翻刻作業を行った大内家所蔵の加野宗三郎宛書簡は次の一四五通である。

・与謝野寛・晶子	二五通	・北原白秋	一四通	・吉井勇	九通(封筒のみ一通)
・白仁秋津	二通	・高浜虚子	三通	・森田恒友	二三通
・榊原紫峰	一一通	・津田清楓	九通	・正宗得三郎	七通
・青山熊治	三通	・村上華岳	二通	・中井宗太郎	二通
・安川敬一郎	二通	・山崎朝雲	一通	・田中冬心	一通
・松瀬青々	一通	・元井三川	一通	・汲古野衲	一通
・正宗得三郎宛晶子書簡	一通	・塩崎庄三郎宛富田溪仙書簡	一通		
				・野長瀬晩花	一通
				・小野竹喬	七通
				・土田麦僊	三通

仮目録より九通少なくなったが、仮目録では封筒のものもカウントしており、翻刻作業の過程で本文と封筒との照合作業を行った。また、続きの書簡を別書簡とみなすなどのミスも発見した。本稿では既に公表されている与謝野夫妻、北原白秋の書簡については書簡本文を省略して解説のみとしたが、その他の書簡は略歴、書簡本文、書簡解説を示している。今回は与謝野夫妻と白仁秋津の書簡を紹介する。凡例は以下の通りである。

【凡例】

- ・書簡翻刻に際しては、仮名遣いはそのまま、漢字は現行の簡略な字体に統一した。
- ・配列は年代順とし、漢数字の番号を付した。

- ・書簡の日付は本文の書き入れを優先し、記されていない場合は、封筒裏書、消印に拠った。
- ・執筆年を確定できない場合は、推定年を示し（推定）と書き入れたが、内容からその年以外には考えられない場合は省略した（例：関東大震災の記述）。年推定ができないものは「年不明」とした。
- ・見出し部分の日付の下には、一行目に（消印局）、消印日付、封筒無しの場合はその旨を記し、二行目に筆記用具、用紙、サイズを示した。サイズは縦×横で、単位はセンチメートルである。次に表書きに記された住所と宛先人名を敬称、脇付けと共に記し、最後に裏書部分の発信地、署名、日付等を記した。
- ・判読不明箇所は□で示した。
- ・基本的に原文のままとし、明らかな誤字脱字等は「ママ」とルビを振るか、解説に記した。

注 1

同資料及び書誌情報は大内氏所蔵のコピーとそこへの書き込みによる。不動産情報サイトをいくつか検索すると、このマンションは一九七二年の竣工となっており、「博多ばってん」一〇二号が一九七二年の刊行であるならば、矛盾が生じる。後日同誌の現物を確認したい。
 （國生雅子）

（二） 大内真砂子氏所蔵与謝野寛・晶子書簡

1 九州旅行前

大内家には計二五通の与謝野寛・晶子書簡が保管されていたが、現在すべてが八木書店『与謝野寛晶子書簡集成』（以下『書簡集

『成』と略)の一卷(二〇〇二年一〇月)、二卷(二〇〇一年七月)、三卷(二〇〇二年一月)に収録されている。うち、封筒が失われている封書が一三通、封筒アリが八通、葉書が四通である。従って正確な年月日が不明のものが約半数を占め、差出年月日は推定せざるを得ないのだが、他の大内家書簡との関連からより正確な推定が可能となった書簡もあるし、それ以前に『書簡集成』の見解にはいくつか疑問も感じられる。本章では、差出年月日の推定に関する考察を中心に与謝野夫妻の書簡を見ていきたい。この他、加野宛ではなく正宗得三郎宛ての晶子書簡一通もあるが、これは正宗の加野宛書簡に同封されていたものと考えられる。まず、その晶子書簡の全文を次に記す。

啓上

封筒無し 毛筆、巻紙18×99

この間はおたずね下さりてうれしく存じ居候

わたくしらは今日は朝より此之家の美術品を見にまゐり候。渋谷あたりの新緑をなつかしくおもひ申候。

さて加野氏の懐紙を日本橋へもとめにまゐり候ところおもひの外高価にて候ひしかばはなはだ申しかね候へどもかなた様へ三十円をおくりねがへ候やうおしらせおき下されたく候。いろ／＼お手数かけ申し申しわけなく存じ居候。

右一寸御ねがひまで

かしこ

五月十一日

晶子

正宗様

おもとに

『書簡集成』二巻（書簡番号10）に収録されているこの書簡は、大正七年のものと推定されている（注1）が、実は大正六年と考えられる。根拠は、大内家所蔵の大正六年五月二日付の正宗得三郎書簡である。

大正六年五月十二日（不明） 6・5・12（福岡） 6・5・14

毛筆、巻紙18×63

福岡市中奥の堂 加野宗三郎様

東京府下上渋谷一三七 正宗得三郎 五月十二日

冠省御免下され度し

先日一寸端書にて晶子さんの送金二十円を御送り候が本日晶子さんより右の手紙□□候何んだが急に又申上るも変んだと思ひましたが取不敢御手紙を同封して御送りしますで不悪御承知被下の上三十円半切カイ紙御受取の上御送付の事御願申上げます
油絵の事重ねく丸善との話しも願上候

「画字□□□□」着の上は前便にて申上候通り何卒宜しく紹介御願候

正宗

五月十二日

加野兄

この書簡中の「右の手紙」が五月一日付の正宗宛晶子書簡とみなされる。文中にある「先日」の「端書」は大内家には保管されていなかった。正宗を介して宗三郎が晶子に懐紙を依頼し、その紙代に宗三郎が送金していた二〇円では足りず、三〇円だったのでその代金を請求しようとしているのであるが、宗三郎に直接ではなく、正宗に伝えてくれるよう依頼している。この書簡は与謝野夫妻の全書簡中で加野の名が登場する最初の書簡である。夫妻と宗三郎が知り合ったのは大正六年六月七月の九州旅行の際と考えられていたが、それ以前に書簡を介して親交があり、宗三郎が懐紙の類を依頼していたとみられる。しかしながら金銭の話が直接できるほどに打ち解けた仲ではなかったことも推測される。正宗得三郎（一八八三～一九六二）は岡山県出身の洋画家で、小説家正宗白鳥、国文学者正宗敦夫の実弟である。正宗得三郎の書簡は『書簡集成』には二通しか収録されていないが、兄の敦夫宛は二四通認められ、また多くの書簡中にその名が記されているところを見ると、兄弟そろって与謝野夫妻と親しく交わっていたものと推測される。事実、大正七年の夏は、与謝野家の男の兄二名が正宗の故郷、岡山で過ごしている（⑦大正七年九月六日晶子書簡）。詳しくは宗三郎宛の正宗書簡七通を紹介する際に考察する予定であるが、加野宗三郎と与謝野夫妻の結びつきに正宗得三郎が果たした役割は存外大きいのではないかと思われる。

2 大正期の九州旅行

与謝野夫妻は大正六年六月七月と翌七年一月～二月に九州を旅行し、加野宗三郎の歓待を受けている。逸見久美『新版 評伝与謝野寛晶子 大正篇』（八木書店 二〇〇九年八月）には、小林天眠、白仁秋津、加野宗三郎等の書簡を引きつつ、旅程の詳細が記されている（276～279頁、299～302頁）。小林天眠（本名・政治 一八七七～一九五六）は「よしあし草」「関西文学」時代からの知友である大阪の実業家。彼及び家族にあてた書簡は、『書簡集成』に先立って、植田安也子・逸見久美編『天眠文庫蔵／与謝野寛晶子書簡集』（八木書店 一九八三年六月）にまとめられている。「明星」時代からの弟子である大牟田在住の

白仁秋津に関しては、詳しくは本稿(四)章の解説を参照願いたい。明治四〇年の「五足の靴」時代から、九州旅行の重要な世話役の一人である。

大正六年の旅では福岡県(博多、若松、大牟田、伊田)の他、大分の耶馬溪、日田にも足を延ばした。四歳になる四男アウギュストを伴った旅であった。しかも晶子は身重である(九月三日に六男寸出産、二日後死亡)。身体的に過酷な旅であったことは容易に推し量れるが、事実小林天眠宛書簡(大正六年六月二五日)には「ごはんを頂くことが苦痛」「あまりに忙しい」「はやくかへりたい」等の愚痴が漏らされている。なお、往復共に途中下車し大阪の天眠を訪ねている。『新潮日本文学アルバム 与謝野晶子』(新潮社 一九八五年一月)には、大正六年神社で撮影した写真が掲載されているが、同年六月二一日の天眠夫妻宛ての絵葉書は「官幣大社香椎宮御本殿及拝殿」が使用されており、伊田の炭鉱を見たあとにこのお宮に参ったと記されている。文学アルバムの写真は、この折にもものかもしれない。また、『年表作家読本 与謝野晶子』(河出書房新社 一九九五年四月)には、福岡県田川郡伊田炭鉱での写真が掲載されている。

スペイン風邪が流行した翌年は、久留米の榎紅葉見物が目的の一つではあったが、この年は暖かで、紅葉には少し早かったようである。一月一日東京発、一三日夜博多着。福岡以外では、唐津、長崎、島原、熊本を回り、別府から海路大阪に向かった。一月二五日の白仁宛書簡によれば、別府までは宗三郎だけでなく、彼の祖母と娘も見送りに同道したという。祖母は万屋二代目加野惣次郎の妻・モトであろう。大正二年生まれの長女・千賀子は五歳、同五年生まれの次女・真砂子は二歳である。真砂子氏はその時ねんねこに負ぶさって見た月がきれいだったことを覚えていると語っていた。

長男の与謝野光は夫妻の旅行について次のように回想している。

旅行はよくしました。それは、好きで行ったのが半分ですが、一つは巡業みたいなものでね、早く言えば。招かれて行く

と、いくらかお金がもらえますから、仕事でもあつたわけです。だから、「どこそこへ行きたい」って言って行くことは少なかったです。お招きで行くことがほとんどでしたね。日本全国ほとんど行つたでしょう。(中略) たいいてい歌を詠みに行きましたね。お弟子さんが招いてくれる場合が多くて……、その土地の人が招いてくれたりね。(中略)

招かれて行きますと、歌会をやったり、それから短冊を頼まれて書いたりね。そうするといくらか実入りがあつて、うちの家計が息つくというわけです(笑)、本当のことを言うと。一種の巡業ですよ。だからずいぶん、ある意味でストレスもあつたと思います。母はよく頑張りましたねえ。旅行するつて、今と違うからたいへんなんですけど、身体が丈夫だったんでしょね。相当歩かなきゃいけないようなところへも行きましたようですからねえ。(『晶子と寛の思い出』思文閣出版 一九九一年九月 174～175頁)

随分とあけすけな内輪話ではあるが、「明星」の時代から、吟行を兼ねた地方巡業は彼らにとって重要な仕事であつたし、地方の後援者との繋がりには経済基盤の脆弱な大家族の与謝野家にとって命綱とも言えた。それらの中には、親身に夫妻をサポートし、単なるパトロンと芸術家の繋がりを超えた関係性を築き上げた人々もいる。代表的な例が小林天眠であるが、二度の九州旅行を通して、与謝野夫妻にとって宗三郎が天眠に近い存在へと高められていったであろうことは、残された書簡の内容から推測される。二度の九州旅行に関係する大正六～八年の書簡は次の一一通である。『書簡集成』の巻数と書簡番号、及び頁数を付記し、簡単な内容と特記事項、及び差出年月日の推定に関する疑問点を注記しておく。なお、寛単独、晶子単独、両者連名の三種が混在しているので、その点を一行目に付記しておく。

① 大正六年六月前半（推定） 封筒無し 寛・晶子連名

毛筆、巻紙18×8

* 一巻—396（282頁）

天眠宛ての書簡を参照すると、五月二八日東京発、天民宅に滞在した後六月一三日に岡山に向かい、一五日には若松から書簡を出している。ここに二泊した後博多に向かい、おそらく二泊ほどして一九日に博多発、二二日に伊田炭鋳、二四日、二五日日田、耶馬溪を経て帰京という日程が判明する。この書簡には日田、耶馬溪を経た後伊田行き意向が示されており、そのため伊田炭鋳行きを二三日頃まで延期してほしいという内容である。「この義ハお目に懸かりてご相談可申上候へども」とあるので、博多で宗三郎に会う前の書簡ということになる。『書簡集成』では大正六年六月日不明と推定しており、妥当な判断だが、博多に来る前、六月前半とまでは時期を詰められるのではないかと思われる。宛名は「藤原様／加野様」となっているが、「藤原」とは、大正六年六月六日白仁宛書簡に「若松其他ハ藤原賢然氏が配慮しくれられ候」とある人物と思われる。なお、博多で加野宅に宿泊したとするならば、環水荘はまだ建てられていないので、中奥堂の店舗兼住居ということになる。

② 大正六年七月十六日（九段） 6・7・16 寛・晶子連名

ペン書き、絵はがき（有島生馬画与謝野夫人の燈下の顔） 14×9

福岡市中奥堂町 加野宗三郎様令夫人様

東京麹町区富士見町五ノ九 与謝野寛 晶子

* 一巻—399（284頁） 内容は帰京報告。

③ 大正六年七月三十日（推定） 消印判読不能 寛・晶子連名

ペン書き、絵はがき（有島生馬画与謝野夫人の燈下の顔） 14×9

福岡市中奥堂町 加野宗三郎様 御侍史

*一巻―403 (286頁) 暑中見舞い ②と同じ葉書が使用されているので大正六年と推定。

④ 大正七年三月十六日 (九段) 7・3・17 (福岡) 7・3・19 寛

毛筆、巻紙18×151

福岡市中奥堂町 加野宗三郎様 御侍史

東京市麹町区富士見町五ノ九 与謝野寛

*二巻―3 (3頁) 宗三郎の従弟がお土産を持参し与謝野家を訪ねたので、そのお礼。

⑤ 大正七年四月二日 (不明) 7・4・2 (福岡) 7・4・4 寛

毛筆、巻紙18×124、印刷趣旨文20×27

福岡市中奥堂町 加野宗三郎様 御侍史

東京富士見町五ノ九 与謝野寛

*二巻―6 (5頁) 『書簡集成』には注記されていないが、「晶子懐紙千首会趣旨」が同封されていた。

⑥ 大正七年六月一日 封筒無し 寛

毛筆、巻紙19×256 名刺一枚

〈名刺〉

博多の親友加野宗三郎君を御紹介致候。

与謝野 寛

斎藤茂吉学兄

環水荘遺翰―加野宗三郎宛書簡集―(一)(國生・井上)

「昨年初めてお目に懸り候」の部分から大正七年と判断できる。斎藤茂吉への紹介状(名刺)が同封されていた。宗三郎が求めたものであるらしい。茂吉は前年の大正六年に長崎医学専門学校(現・長崎大学医学部)に教授として赴任していた。「若しこの秋の末ニ筑後のはじ紅葉を見に参り候はゞ」とあり、この頃既に九州旅行が検討されていたことが明らかになる。また、「御祖母様のためニ新しくお建てなされ候御隠栖ニ鴻臚荘の御命名まことに面白く候。」とあるが、これが柳北亭の名で知られている建物なのかどうかは不明。

⑦ 大正七年(推定) 九月六日 封筒無し

毛筆、巻紙18×211 晶子

*二卷―67 (44頁)

『書簡集成』では大正八年九月二日と推定。『天眠文庫蔵／与謝野寛 晶子書簡集』収録の大正八年六月一日付け小林雄子(天眠の妻)宛て書簡に、子供たちが千葉の長者町という海岸に行くことになりそうだと記されており、この書簡には晶子の娘たちが長者町に行ったと記されている、その符合だけで大正八年と判断するのはいささか疑問である。「この秋は九州にと人に申しながら」云々とあるので、素直に読むならば一月―二月に九州を旅行した大正七年となる。また「一昨夜末日会にて正宗氏にあひ候てはかたの話をおほくいたし候。皆あなた様を中心としたることに候ひし。十月にかの方の画室も出来上り候よし。」とある。正宗得三郎の大正六年一〇月五日の宗三郎宛書簡には「来年の事を言へば鬼が笑ふと言ひますが、どうしても早く画室をつくらねば思ふ様な大作や又裸体が描けないのでほんの小屋の様な室でも作る為めに力をそゝいでゐます。」と記されているが、それが実現したと思われる。以上を根拠にして大正七年と推定。得三郎、宗三郎、晶子三者の親交の深さが文章の端々からうかがえる。書かれた月に関しては、二科会が一〇日から開催されると記されており、これは九月九日から上野竹の台で開催された第五回

展を意味していると考えられる。大正六年以降二科会は九月開催が定着しているのので、九月と確定としてよからう。なお、『書簡集成』では「秋かぜの吹きそめ候ひし……野分」の部分より九月と推定している。また、本文末尾の日付は「一六」と読める。ちなみに、大正七年九月二日には夫妻連名で白仁秋津に葉書が書かれており、秋の末に櫛の紅葉を見に行くと言っている。「この秋は九州にと人に申しながら」の「人」は具体的には白仁をさすのかもしれない。加野の娘二人とアウギュストにも触れられており、前年の旅行以降、家族ぐるみの交友へと深まっていたことが知られる。

⑧ 大正七年十一月七日 封筒無し 寛・晶子連名

毛筆、半紙一枚25×34

*二巻―30(19頁) 一月一日夜行で東京発、大阪に寄り一三日夜に博多着との旅行の予定が記されている。「悪性の風邪」(所謂スペイン風邪)が話題になっている。

⑨ 大正七年十一月十一日 封筒無し 寛

毛筆、巻紙18×94

*二巻―32(20頁) 宗三郎の電報に対する急ぎの返信。宗三郎がスペイン風邪の罹患歴を尋ねて来たらしく、寛は一〇月末より一月初めにかけて罹患済みと答えている。

⑩ 大正七年十二月十七日 封筒無し 晶子

ペン書き、便箋一枚28×22

*二巻―38(22頁) 帰京後の礼状

⑪ 大正八年一月二十日 封筒無し 寛

毛筆 巻紙19×221

*二巻―46 (28頁) 旅行後初の寛の書簡

旅行中の出来事や話題となった事柄の一端が窺える。以下に主なものを箇条書きしておく。

- ・宗三郎が漱石の原稿を所望したらしい。寛は虚子を通じて手に入れようとしている。
- ・寛たちが揮毫した焼き物を記念として白仁秋津にも渡すよう依頼している。大内家で國生・井上がかつて見せて頂いた火鉢にそのようなものがあつたと記憶している。

・宗三郎は二科展を福岡でも開催したいと希望していたらしい。寛は有島(生馬)石井(柏亭)と相談したいと述べている。

・雑誌に関して「御助成」をお願いしている。第二次「明星」の件であろう。

・「紺昏の屏風ハ出来上り候にや。悪筆を汚し候上に却て過分の御礼をいたゞキ候事兩人より御礼申上候と御伝へ被下度候。」とある。この屏風は大正七年六月一日の書簡の「屏風の儀拜承致し候。御都合およろしき時ニお遣し被下度候。或ハこの秋までお延ばし被下御地へ参り候節ニ悪筆を振ひ候てハ如何にや。いづれとも御任意ニなし被下度候。」という部分に呼応していると思われるが、「兩人より御礼申上候と御伝へ被下度候。」という記述から、屏風の依頼者は宗三郎ではなく、宗三郎が紹介した他の人物であつた可能性も考えられる。

なお、この旅行の際に寛、晶子がそれぞれ歌百首を書いた「金泥歌経」上下巻が残されたが、宗三郎の孫にあたる加野象次郎氏によって日本近代文学館に寄贈されている。

3 大正期後半 (大正八年～二年)

二度の九州旅行を経て、与謝野夫妻と宗三郎はより親密さの度合いを深めていった。大正八年から一二年までの四年間、七通の書簡が残されている。特に晶子の書簡には宗三郎一家への細やかな気遣いに溢れ、家族写真を所望したり、自分の子供たちのこと

もあれこれ綴っている。次の⑫⑬の書簡は、如何に晶子が宗三郎に心を許し、頼っていたのかを明らかにするとともに、晶子のライフワークであった「源氏物語」口語訳の成立過程に関する重要な資料である。

⑫ 大正八年二月（推定） 日不明 封筒無し 晶子

ペン書き、便箋五枚19×23

原稿用紙（神楽阪山田製）一枚26×36

*二巻―52（32頁）

便箋五枚にペン書きで細々と綴り、紙が足りなくなつたので欄外に「こんな不良紙よりございませぬからごめんください。」とメモし、原稿用紙に書き継いでいる。年月の推定は『書簡集成』に従う。

晶子は明治四五年二月から大正二年一月まで、『新訳源氏物語』を金尾文淵堂から出版している。これとは別に、明治四二年九月一九日、小林天眠は書簡で源氏物語口語訳の刊行を申し出ている。毎月四〇枚を二〇円の稿料で、百か月後の大正七年完成を目標としていた。天眠は同時に出版社立ち上げのための積み立てを行い、源氏物語を最初の刊行物とする目論見だった。しかし約束の大正七年、天佑社と名付けられた出版社はスタートしたが、晶子の原稿は完成していない。早く出版したい天眠側と、良いものを時間をかけて完成させたいと謝野夫妻側とで交渉が繰り返され、結局八〇枚五〇円で書き継ぐことで合意した。宗三郎宛のこの晶子書簡によれば、天眠はそれまでの原稿を「二千幾百円」で天佑社に引き渡したが、天佑社の支配人が原稿をせかすようになつたという。晶子としてはゆつくりと仕事に向き合いたいので、お金を天佑社に返して、他に援助者を探したいと希望している。そこで加野家と親しい関係にあつた安川家に助けを求められないかと打ち明けているのである。なお、安川家と加野家の関係については、安川敬一郎の書簡を紹介する際に触れる。この話は実現しなかったが、晶子が書き継いでいた原稿は、関東大震災での焼失という悲劇を乗り越えて、『新訳源氏物語』として昭和一三年から一四年にかけて刊行されることになる。その「あとが

き」に「若菜」以降は別人の筆になるといふ説が示されているが、既に加野宛書簡に「このことは誰にも申さぬことです。若菜以後は紫式部と全く別人の手になったことを確実に去年の夏ごろにいろいろの證をえて考へつきました」と述べられている。

⑬ 大正八年三月十日 封筒無し 晶子

毛筆、巻紙18×295

*二巻—193 (131頁)

『書簡集成』では大正一二年と推定しているが、内容的には前便と繋がっているので、明らかに大正八年。宗三郎からの返信を受けた書簡である。彼としては断らざるを得なかつたのであろう。「あなた様が心苦しと思召すことを唯々心苦しとおもひ候にて今はこゝろがみたされ居り候」と、彼を煩わせたことを悔いているようである。また、前便は夫にも相談せず、彼女が独断で書いていたことも明かされている。本文末尾に「十日」とあり、日付は確定される。月に關しては『書簡集成』は「四日にひなをしまひ候とき」という部分に着目して三月と推定しているが、これは確定としてよいだろう。宗三郎の妻・トミエは大正八年三月一日に三女・春生を出産することになるが、「おく様のお産このやうにお近しとも存じ候はざりことに候へば」云々とあり、明らかに出産が近づいた三月と判断できる。ちなみに、晶子も三月末日に六女・藤子を生んでいる。前便には「私は四月に産をいたします。奥様もその頃の御こと、存じ上げます。」とある。

わずか二年の間に、晶子にとって宗三郎は心のうちを明かし、援助を乞える大きな存在になっていたのである。なお、國生が平成五年当時勤務していた筑紫女学園大学日本語日本文学科の学生、谷川恵美、中尾泰子、長嶺里美の三名は卒業論文として、当時未発表であった与謝野夫妻書簡の翻刻と考察を行い、「筑紫語文」三号（一九九三年十一月）に⑪⑫の書簡を「未発表・与謝野晶子書簡の翻刻と解説」として発表している。

その後の関東大震災までの書簡を紹介していきたい。

⑭ 大正九年三月二十三日（不明） 9・3・23（福岡） 9・3・25 寛

毛筆、巻紙18×208

福岡市中興堂町 加野宗三郎様 御侍史

東京市麹町区富士見町五ノ九 与謝野寛

*二巻―92（61頁）

津田清楓が宗三郎の別荘に滞在したと記されているが、柳北亭をさすのかどうかは不明。松本悟郎訳ラッセル『社会改造の原理』（日本評論社出版部 大正八年）や河上肇『社会問題研究』誌への言及がされており、特に後者は「毎月御覧の御事と存じ候」とあり、金に糸目をつけず美と芸術に耽溺していたかのような宗三郎が、実は社会問題に関心を寄せていたことが明らかとなる。末尾に短歌二首が添えられている。なお、宗五とは宗三郎の叔父堺宗五郎である。

ほろ／＼と涙おちきぬすゑもの師宗五の瘦せしことをおもへば

すゑものし瘦せし宗五もその甥の宗三郎も愁をば知る

⑮ 大正十年（推定）六月二十九日 封筒無し 寛

毛筆、巻紙19×172

*二巻―317（208頁）『書簡集成』では大正一三年と推定。月日は書簡末尾の日付によって確認できる。大正一三年とした根拠は「行成や佐野の書ハ勿論」の部分に関わる記述が「文化学院略年表」にあるからとしているが、いささか説明不足である。確実なのは文化学院の夏季休暇について触れているので、同校が開講した大正一〇年以降であること。「正宗得三郎君の渡欧費を作るための絵のオオクシヨンが十日より三四日間催され」の部分に着目すると、彼の二度目のヨーロッパ留学は大正

一〇年から一三年にかけて。普通費用が出来てから出発するであろうから、この書簡は大正一〇年と見るのが妥当ではあるまいか。

⑯ 大正十一年（推定）三月二十八日 封筒なし 寛

毛筆 半紙24×34

二卷—199（134頁）文中にある「平和博」が東京府主催平和記念博と考えられることより、『書簡集成』では大正一一年と推定。「明星」も予想外に発送して参ります」とあるが、第二次「明星」創刊は前年の大正一〇年一月である。ちなみに、大正一〇年二月二五日（推定）の内山英保宛書簡によれば、「明星」再興の資金として友人たちに資金を割り当てて三月一五日までに送るよう要請しているが、その一覽によれば宗三郎には二百円をお願いしている。彼のところにも同じような内容の書簡が送られたと推測されるが、大内家には残されていなかった。

⑰ 大正十二年七月二十七日（不明）12・7・27 寛

毛筆、巻紙19×172

福岡市、中奥堂町 加野宗三郎様 御侍史

東京、麴町区、富士見町五ノ九

*二卷—279（186頁）加野が送った服地に対するお礼状。

⑱ 大正十二年九月二十八日 封筒無し 寛・晶子連名

毛筆、巻紙16×282

*二卷—287（192頁）

関東大震災直後の書簡。年、月はそこから推測できる。家も家族も無事であり、鷗外全集の原稿や宗三郎から預かった短冊類な

ど、大事なものは持ち出せた事などが記されている。名古屋の友が現金を送ってくれたので、宗三郎からは特に送ってもらう必要はないとのことである。

4 昭和期の九州旅行

⑱ 昭和三年七月三日（不明） 3・7・3 寛

毛筆、巻紙19×179

福岡県筑紫郡雑餉隈 加野宗三郎様 御侍史

東京市外下荻窪三七一 与謝野寛

二巻—433（283頁） 環水荘に送られた最初の書簡。宗三郎から誘われたのであろうが、夏休みに来福するのは無理であることが述べられている。

⑳ 昭和四年七月五日（麹町） 4・7・6 寛

毛筆、巻紙19×68

福岡市中奥堂町 加野宗三郎様 恵展

（印刷）東京市、外下荻窪、三七一（電話荻窪一五三） 与謝野晶子（墨書きで「寛」）

*二巻—470（305頁）九州旅行の旅程が記されている。二二日の夜行列車で東京を立ち、鹿児島へ直行し、帰途別府より博多へ引返す予定。

㉑ 昭和四年七月十日（麹町） 4・7・10 寛

毛筆、葉書14×9

環水荘遺翰—加野宗三郎宛書簡集—（一）（國生・井上）

福岡市、中奥堂町 加野宗三郎様

東京市外下荻窪三七一 与謝野寛

*二卷―473 (306頁) 旅行の予定変更。二三日の朝の急行にて東京を立ち、二四日午前八時に門司着、鹿児島へ急直。帰途博多に行くが日にちは後日連絡することのこと。

②② 昭和四年七月十一日 (麴町) 4・7・11

毛筆、葉書14×9

福岡市、中奥堂町 加野宗三郎様

東京市外下荻窪三七一 与謝野寛

*二卷―478 (308頁) 予定再変更。二一日朝東京発、二二日朝門司着、鹿児島に直行し、環水荘には八月一〇日頃二泊の予定。

②③ 昭和四年九月六日 (中野・杉並) 4・9・7

毛筆、絵はがき (第十六回二科美術展覧会出品石井柏亭暑き日) 14×9

福岡市外、雑餉隈 加野宗三郎様令夫人様

東京市外、下荻窪三七一 与謝野寛 晶子

*二卷―482 (319頁) 旅行お世話になったことへの礼状

次の写真はこの旅行の折に環水荘で撮影されたものであろう。左から晶子、寛、宗三郎。九州旅行の詳細については、(四)章の白仁秋津書簡を参照されたい。



② 昭和五年（推定）七月十九日 封筒無し

寛・晶子連名

*二卷―59（三九頁）『書簡集成』では大正八年と推定しているが、「環水荘」の名が記されているので、当然昭和ということに

環水荘遺翰―加野宗三郎宛書簡集―（一）（國生・井上）

二六三

なる。「日田へ再游のよろこびを御与へ被下候てより早くも一年と相成り申候」の部分を、大正期の九州旅行と捉え、二度目の旅の翌年の大正八年としたものであろう。なお、月日は書簡本文末尾に記されているので確定である。台風見舞いの書簡だが、「この秋にハ別府よりクジフの山域に入り阿蘇に出て候やうの予定に候へども」と記されており、前年に引き続きこの年も九州旅行を計画していたことは、同年七月二〇日の白仁秋津宛書簡に「この秋のクジフ行ハ、この度の暴風雨にて頓挫致さず候や」の部分からもうかがえる。白仁のアドバイスに従って一年先送りしたことは、九月一二日の白仁宛書簡「御配慮被下候九州の旅行ハ仰のごとく来年の事に致し申すべく候」に明らかである。

与謝野夫妻は昭和六年九月一〇月、別府、亀の井ホテルの油屋熊八の祝賀会に出席するために大分に向かい、久住、湯布院にも足を延ばしている。さらに翌七年、六女・藤子を伴い、七月三一〜八月一七日、大分、熊本（阿蘇、人吉）を巡っている。この二回の旅に関わる書簡は環水荘には残されていないが、大内氏によれば、夫妻が宿泊した記憶があるという。九州旅行については、近藤晉平『九州における與謝野寛と晶子』（和泉書院平成一四年六月）、「寛と晶子 九州の知友たち」（和泉書院二〇一一年九月）も参照されたい。

5 最後の書簡

②5 昭和九年九月二十七日（下谷） 9・9・28 寛

毛筆、巻紙19×105

福岡市外、雑餉隈 加野宗三郎様 御もと

（印刷） 東京市、杉並区、荻窪一ノ二一九電話荻窪二二五三番「冬柏」発行所 与謝野寛

*三巻―374（205頁）

宗三郎の祖母・モトは昭和九年九月二日に死去。そのお悔やみの手紙で、これが大内家に保管されていた与謝野夫妻の書簡の最後のものとなる。寛もまた、翌年三月二六日肺炎で死去する。享年六二。

注1 『書簡集成』では大正七年四月二日寛書簡に照らして大正七年と推定したと注記されているのだが、当該書簡は宗三郎が野村望東尼の遺墨を探してくれていることを知り、寛が「御親戚様の御愛蔵をおねだりしては相済まず候」と遠慮している内容である。懐紙代三〇円を恐縮しながら請求している晶子書簡の差出年推定の根拠とする理由は不明である。

(國生雅子)

(三) (未発表) 安西春生氏所蔵与謝野晶子書簡

【書簡本文】

大正九年(推定) 六月一日 封筒無し

毛筆、ピンク巻紙 18×193

啓上

御無沙汰とも心には存ぜず いつもこのことかのお話し申し上げたしと存じ、しか存じたるあとにはおはなしいたしたるやうにていつとなく日をかさね候。

御別荘の庭のお噂とてありがたく存じ候。

いつぞや御ねがひいたし候こと忘却し給はでと先ず涙ぐまじき心地をおぼえけれ候。

環水莊遺翰——加野宗三郎宛書簡集——(一)(國生・井上)

二六五

お子様方大人びさせ給ひしことおどろくばかりのこととおもはれ候。御やまひもなし給はざりけりと心やすくなり候。お子様は若々しく見えさせ給ふことうれしく候へども、あなた様すこし、これ隔ての月日のかずにまさりねびさせたまひたりといく度も大きく見えんもの、やうにおなじ御かほをのぞき申し候。

御隠居様も御すこやかにて結構の御事に候。田中様の御かほはよく見えず、津田様も仰せらるる人らしからず候。

お庭のまことにうつくしくよく候上木立の立ちさままことにあなた様の御このみとうなづかれ候。

いろ／＼経済界の動揺のことなど却りて御心づかひ多くおはしましたらんと想像いたして御きのどくに存じ候こと多く候。

明の濱の御うちも御ころにまかせておもしろく作りいで給ふべしと私らの心は唯是のやうなること、先づおもはれ候へども御苦勞に遊ばさる、ことのはしがはしだにたどり得ぬこと、はづかしく存じ候。

去年は七月ごろ入らせらる、こと、してお待ちいたしてはかり居り候ひし。

わたくし達四月に六甲山へ参り居り候て五月にかへり候がその二日に大阪にて車よりおりて、完全、に後頭部をした、かうち候それより何となく心の落ちるゝ頭のわるくなりて明日はあさましき無能者とならんかなど神経も手つたひて神経衰弱になり居り候。

このようなる字をかき候ても一層よみにく、見給ふことなどおもひ候。うたはその、ちもすこしはよみ候へばよく候、すこしは出来候べし。

過日全集の第二と「女人創造」とをさし上ぐべく候。あとの方がまだ三日はかゝるやに候。

子供達は皆大きくなり一の子は四月より慶応の医科に入り申候。アウギユストも学校へまゐり候。

御一の君もまた同じさまにと推し居り候。またかゝじといたし居りし絵を石井修三様にほめられ絵の具かひそへなど致し候はをかしき子供らしき心と自ら笑ひ居り候。

久留米のやどにて朝の御物語のつゞきを必ず御きかせ下されたく。

まことに御なつかしくつねに存じ上げ候。

津田様にそのうちお目にかゝり御別荘の話もうかゞべく候。

奥様によるしくねがひ上げ候。隠居様にも

かしこ

六月一日

加野様 御もとに

晶子

【書簡解説】

1 書簡所蔵者と、「大正九年」推定の根拠

晶子から加野に宛てた本書間は、宗三郎の三女、安西春生氏の手元に保管されてきたものであり、八木書店『書簡集成』には未収録である。そのため他の寛、晶子書簡とは別に、全文を翻刻し、解説を施した。

封筒が失われているため差し出した年は不明だが、書簡本文に①「過日全集の第二と『女人創造』とをさし上ぐ」、②「わたくし達四月に六甲山へ参り居り候て五月にかへり候」、③「一の子は四月より慶応の医科に入り申候。アウギユストも学校へまゐり候。御一の君もまた同じさまにと推し居り候」とある事項が、すべて大正九年の出来事であることから、「大正九年」と推定した。以下はその詳細である。

① 晶子が進呈するという「全集の第二と『女人創造』」は、『晶子短歌全集』第二卷（新潮社、大正九年四月）、評論集『女人創造』

（白水社 大正九年五月）をさす。

② 大正九年三月二三日の寛書簡の、「小生夫妻四月十日頃より、二週間ほど六甲山苦楽園に滞在可致候。京阪よりお上り被下久々の機会をお与へ被下度候。奥様お子様をも同伴いかゞに候や。紫峯君などにもお引合わせ致たく候」と符合する。

③ 「一の子（長男光）」の慶応医科大学入学は大正九年。大正二年生まれの「アウギユスト」も、「御一の君（宗三郎長女・千賀子）」も、九年に小学校入学。なお与謝野夫妻が加野と初めて顔を合わせた大正六年六月の九州旅行には、「アウギユスト」が同道。全体にこの書簡には、加野一家に対する懐かしさが溢れており、六年の初対面から日を重ね、七年一月には一週間ほど夫妻揃って加野宅に滞在し、この間『金泥歌経』等を仕上げており、まさに家族ぐるみの親しい交際であった。

2 画家グループ（「田中様」「津田様」「石井修三様」と「御別荘」について

書簡には加野とも相識の画家の名前が三名記されている。それぞれ「田中冬心」、「津田青楓」、「石井柏亭」であり、詳細はそれぞれの書簡解説で行う予定であるが、冬心の差し出し年不明の書簡には加野の援助への御礼が述べられている。また本書間の三ヶ月後（大正九年九月二二日）に、津田もまた「当方も皆々無事田中君も頼りと勉強して居ります、さて甚だ申しかねますが実は昨今金が無いので困り居りますが先達のあの金を頂き度のです、どうか御送りを願ひとう存じます若し御都合で全部で無くともよろしく御座いますからどうか何分宜敷御願ひ申上げます」（傍線引用者）と書き送っている。また津田は先にも引用した大正九年三月二三日の寛書簡において「この頃ハ津田青楓君が御別荘に滞遊致され候よしにて縷々消息有之候。それを聞きて大に羨ましく相成り御地までも参りたしと存じ候へども」と消息されている。文面から宗三郎が写真を送ったと推測できるが、その写真はこの折の「御別荘」滞在中のものであろう。

加野の別邸と言えば昭和初期、雑餉隈に建てられた「環水荘」が有名だが、隠居所として建てられた住吉の和風建築「柳北亭」も、戦後の加野家が何所帯かで住んでいたほどの大きな邸であった。しかしながら、いつ建てられたか、その命名者が津田なの

かなど、確かなことは分かっていない。与謝野寛書簡（大正七年六月一日）に、「御祖母様のため二新しくお建てなされし御隱栖二鴻臚莊の御命名まことに面白く候。そのあたりの風物さへなつかしく存じ申候。若しこの秋の末二筑後のほじ紅葉を見に参り候はゞ一日その莊二晶子と兩人にて御案内を乞ひ記念の歌を留め申度候。旅人卿の酒量ハ無き小生も憶良だとかの風懐ハ用意致居り候」とある。「御祖母様（＝加野惣次郎の妻モトと推定）」の隠居所「鴻臚莊」の名前が寛の書簡に見えるが、それが「柳北亭」に改名されたのかなど不明である。福岡市外姪浜に加野の酒造工場があり、昭和九年の台風で倒壊しているが、工場以外にも「明の濱」に「御うち」があったのかも、今のところ不明である。

3 「経済界の動揺」につて

「いろ／＼経済界の動揺のことなど却りて御心づかひ多くおはしましたらんと想像いたして」とあるが、前記寛の書簡にも「世情の急変に御感慨多キ事ならんと御想像申上候。不快なる事もあれど、また万人をしてまじめに反省せしめ候ことも少なからず」との指摘がある。大正七年一月第一次世界大戦終結後、土地投機が持ち上がる一方、八年には労働争議、小作争議が頻発、流行性脳膜炎も猛威を振るう。大正九年三月一五日の株価暴落が戦後恐慌の始まりとされる。五月二四日には七十四銀行の取り付け騒ぎが各地に波及していった。この年の五月二日には日本最初のメーデーが上野公園で開催されている。

（井上洋子）

（四）白仁秋津書簡

【略伝】

白仁秋津（しらにあきつ）一八七六（明治九）・六・六～一九四八（昭和二三）・二・五。

環水莊遺翰——加野宗三郎宛書簡集——（一）（國生・井上）

二六九

三池郡上内村岩本（明治二二年三池郡銀水村、現大牟田市大字岩本）に出生。本名、勝衛。熊本の洛々巒中学に進学するが家業の没落により四年後に帰郷（秋津長男・欣一氏の談による）。熊本では、新詩社の鉄幹を宗とする「土筆会」を結成し、回覧誌『つくし』を編集した。渋川玄耳編集の『銀杏』には、明治三四年四月から翌年三月までの二二首が確認されている（久保節夫「北原白秋研究ノートⅠ」、啓隆社、昭和五三年一月第二刷）。『明星』一卷二号に「白仁秀峰」で一首入選、その他『関西文学』『よしあし草』、『文庫』にも投稿している。しかしながら鉄幹の乱脈な女性問題、金銭問題を暴露した『文壇照魔鏡』（明治三四年三月）が発行されるや、秋津は激しく憤り、同年七月一七日から一九日にかけて「文壇の賊（上）（中）（下）」（九州日報）を連載して鉄幹を糾弾した。明治三五年、伝習館中学の北原白秋、中島白雨らと文学同好会を結成し、三六年、大石秋華、田中紫江、川口白蕘も交えて回覧誌『常磐木』を五集まで発行した（二冊が現存）。明治四〇年夏の明星派一行の九州旅行（『五足の靴』旅行）に際しては、支援を惜しまず、寛（鉄幹の号は明治三八年に廃した）とも復縁を果たした。以来与謝野夫妻の誠実な支援者となり、北海道の西村一平と並んで「北の一平、南の秋津」と称されている。銀水村の助役、村長を長年勤める傍ら、与謝野主催の歌誌『冬柏』（昭和五年創刊）に投稿を継続した。与謝野夫妻からの来信一五〇通、白秋からの来信三三通は貴重な文学資料として、それぞれの全集（『与謝野寛晶子書簡集成』八木書店、『白秋全集』岩波書店）に収録されている。秋津の屋敷内に「上床の山の秋風すすきだにそむくと見えて身のさむきかな」の歌碑が昭和四四年に、平成二三年には大牟田市諏訪公園内に「五足の靴文学碑」が、大牟田市近代文芸家顕彰会によって建立された。

【書簡本文】

一年不明十一月二十五日（福岡三池）□・11・26

毛筆、巻紙18×71

福岡市中奥堂町 加野宗三郎様 御見舞

三池郡銀水村 白仁勝衛

啓呈

御無沙汰いたし申候ところ御端書によれば先月末来御風邪にて御臥床被成候由承り驚入申候時候変り之勢にもよることならんも少しく長引くことか心にかゝり候間御伺申上候申すにも及はざる□ニハ候へとも御静養専一にて一日も早く御全快遊はず事を遠くより神かけて御祈り申上候御見舞まで

十一月廿五日

白仁勝衛

加野宗三郎様

二 昭和四年六月二十八日 (不明) 4・6・28

毛筆、巻紙18×128

筑紫郡雜餉隈 加納宗三郎様 侍史

三池郡銀水村 白仁勝衛

啓

御手紙有難拜見つかまつり候三月極末に東上彼是二十日はかり滞在いたし候その際与謝野先生及北原白秋君なども往訪 いづかた様も極々壮健にて何よりのことと存上候 与謝野先生からは鹿兒島往訪の事話題ニのはり候もいつもの事にて現実性には乏しき事と存じ候間軽ろく拝聴いたしおきたる次第にて候が秋がよいから今秋ニしたいなど、申され候寛先生よりハ格別の事無之候へど

環水莊遺翰——加野宗三郎宛書簡集——(一)(國生・井上)

二七一

も奥さんはめつきりおふけになりたるやうに思はれ候昨年門口にてお目にかゝりたる折りよりも際立ちてそれがほの見え候。白秋君ハ元氣肥充秋東上の際は丁度改造社よりのたのまれたる執筆書にて二十日ほど殆むど徹宵したとてや、やつれ氣味に見え候も壮健が何よりの幸福だと少しも苦ニせる様子なく結構のことと心ひそかによるこび申候但しアルス社の失敗ニハ少々こたえたらしく候も再生の方法ハついて居候間次第に恢復することと存じ候

白秋君から貴家の事もはなしあり一度是非にお伺ひいたし度存じ申し候その際ハ明年頃ニも有之候事なれば日を期して御邪魔いたすことに致すべく候

蚊ようやく出で次第に暑くるしく相成際なれば御自愛の程願上候

白仁勝衛

加納宗三郎様

【書簡解説】

【書簡一】は、加野に宛てた病氣見舞い状。但し年次は不明である。【書簡二】は昭和四年三月末上京した折の報告。「先生（与謝野寛）が鹿児島行き希望を述べてはいるが、いつも通り現実性は乏しいと聞き流している。しかしながら与謝野夫妻は、同年七月二日から八月一四日にかけて、鹿児島県と宮崎県から高千穂その他の景勝を歌に詠むという依頼を受け、改造社社長の山本実彦の案内による大がかりな九州旅行を実行している。帰路の八月六日の午後は雑餉隈に加野が出迎え、新築の環水荘に宿泊、前掲したように、この折のものと推測される写真が残されている。七日には環水荘に秋津も訪れ、西公園、箱崎八幡宮を見学。八日、九日、夫妻は太宰府、日田の咸宜園に行き、九日、一〇日の二泊は環水荘宿泊。紺紙の色紙に金泥で歌を揮毫している（現、

日本近代文学館蔵)。以上の旅程は前掲『年表作家読本 与謝野晶子』を参考とした。

また、『書簡二』には白秋の近況も報告されており、「アルス社の失敗」に打撃を受けつつも「元氣肥充」で徹夜で執筆しているという。白秋はこの書簡の前年、昭和三年に一九年ぶりの帰郷を果たし、故郷に錦を飾った。白秋の環水荘滞在は、「水環る環水荘は降る雨のいろとりどりに夏いたりつつ」(『夢殿』昭和一八年所収)という歌を生んでいる。

詩人の矢山哲治は、加野錦平(宗三郎の弟で、環水荘の管理を任されていた宗平の子息。昭和一四年一〇月創刊の文芸誌『こおろ』の編集兼発行人)と、春吉小学校の同級生であり、環水荘は刺激に満ちた遊び場だったという。矢山の第三詩集『樞』(一九四〇年)のなかに、散文で書き出された『環水荘』と題された詩があり、「小学生よりの友、キンペイ君に」という献辞が付されているが、そこには彼が目撃した白秋の姿がうたわれている。

日曜ごとにこの邸のガーデンにつどつて、おべんとうを開いたものだったが、幾度か、国民的老詩人にお逢ひしたことがあった。午前陽のみちた芝生をポオチカの方からやつて来られて、悪漢ゴッコに勢揃ひした僕らを、あつたかくぎろりと光る眼で見渡されたり、夕暮、僕の膝から画板をとりあげ、ゆうかりの樹をうつした池水の色をためされたりした。

島にイスバニア風の館

ゆうかりの樹

くすのき かなめののき

いつせいに金の若葉がきらきら鳴つた

島をめぐつていつぱいの池

池へ 日なが夜どほし

水が 五月の水が

らんらんと走りこんだ

(後略)

加野宗三郎と与謝野夫妻、白秋の交友は、環水荘という華やかな交流の場を得て近代詩歌史の一齣を彩っているが、両者と旧知であったのが白仁秋津である。秋津宛の与謝野書簡によつて、時々の九州旅行の目的、旅程を詳しく知ることができるが、大正六年六月の旅行に際しては、「之を機として少しく揮毫を試み御地方の希望者にわかちて多少の旅費をつくりたく候。然るに御地方の有力者に貴下を除きて一人も知己無之候」「福岡県下の同行者へ御勧誘の労をお取り下さるまじくや」と秋津に依頼し、短冊、半折などの種類別の揮毫料も列記している(大正六年五月一七日書簡)。こうした切迫した事情が与謝野側に存在していた九州旅行で、加野と与謝野との初となる面会が実現したのである。

なお宗三郎の家業が傾いてしまった昭和一四年、白仁は次の二首を『冬柏』に載せている。

筑紫なる環水荘はいたく荒れ壁落つれども繕はぬかな(一〇卷二号 二月)

白秋は目を病み宗三は胸を病みわれ足を病み下駄を履き得ず(一〇卷四号 四月)

【参考文献】

・『近代大牟田の明星派歌人／白仁秋津の世界』(白仁秋津を顕彰する会発行、二〇〇七年六月)

(井上洋子)